

Algerman Blackwoods

ブラックウッド傑作集

一、四〇〇円

昭和47年8月10日 初版発行◎

訳者 紀田順一郎
発行者 土屋 邦子
印刷 荘司印刷所
製本 イマヰ製本所
発行所 (株)創土社

東京都文京区水道一〇一

振替・東京 四八六六一

電話 八二一五四九二

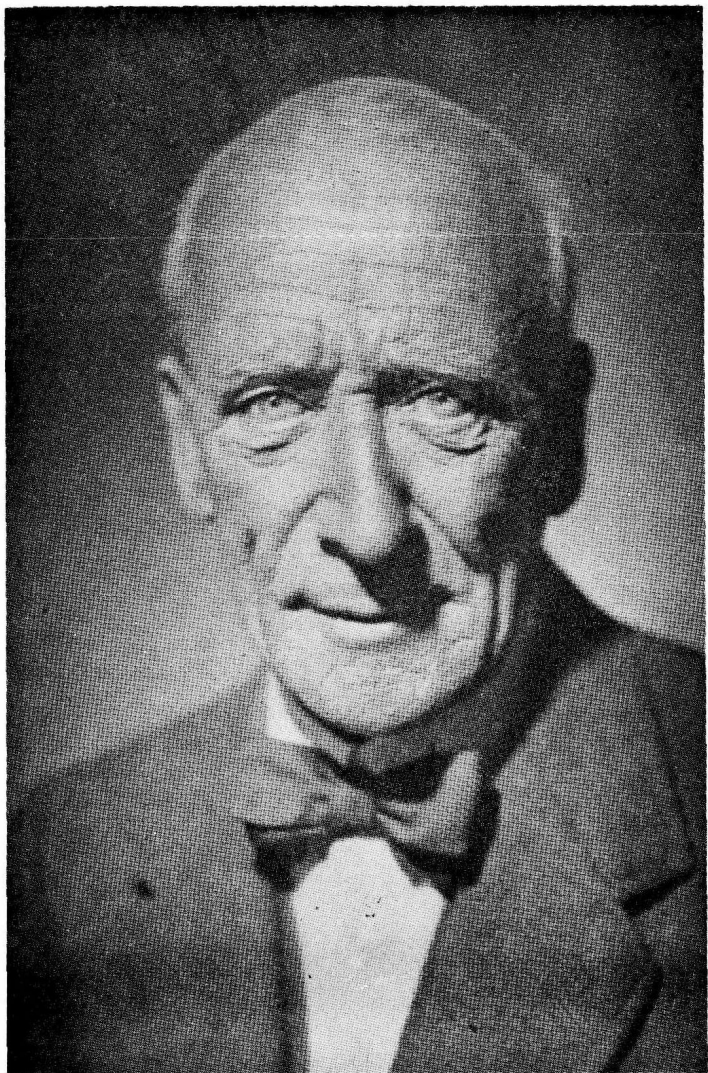
落丁乱丁本はおとりかえいたします

Algerman Blackwoods

ブラックウッド 傑作集



創土社



Algyon Blackwoods

ブラ
ッ
ク
ウ
ッ
ド
傑作集

紀田順一郎訳

目次

序	10
いにしえの魔術	21
黄金の蠅	96
ウェンディゴ	107
移植	174
邪悪なる祈り	193
牧羊 ^{パシ} の祝福	246
囃	283
雪女	315
屋根裏	350
ホーラスの翼	361

炎の舌……………398

犬のキャンプ……………416

解説……………523

ブラックウッド著書目録……………534

函／グスタフ・ドレ

さしえ／グレアム・ロバートソン

序

われわれ人間の肉体を構成する細胞は、七、八年で全体が入れ替るといわれる。ということは、二十一歳と二十八歳とでは、まったく異なるのである。だが、医学は精神の変化については何もふれるところがない。この領域の変化というものが、同一の標準で測ることを許さないからである。

それはともかく、マーチン・セツカー氏(英國有数の出版人)の需めに応じてこの序文を認めることになったとき、ふと浮かんできたのは、いったいこれらの物語を何年も前に書いたのは、この私だったのだろうか、それとも私以外のだれかであったのだろうか、という疑問であった。問題の時点はきわめて錯綜しているうえに、わたし自身も一九〇六年(她女作『空屋』出版の年)の世界を展望する場所にはもはや戻れないところから、この疑問に答えることはとうてい無理である。ダンの連続宇宙やウスペンスキーの異次元時間の概念を借りても、それはおぼつかない。それなのに、最近のヴェルサイユ史などは、三十年前、いや百年前の人間がああ言った、こう言ったなどと、まるで見て来たかのように書いているのである。

ともあれ、知的な出版人の丁重な要請とあってみれば、これはもう不可抗力ないしフオロ、マジュール天災アクト・オブ・ゴッドのようだ。だれでも書くようなことを、私も書かねばならぬ。

だが、これは気の重い仕事だ。というのは、これらの作品を、はじめて書いた時いら

読み返したこともないからだ。肉体的にも、精神的にも、靈的にも、当時の私とは想像以上に変化したものがあるにちがいない。これらの作品は、現在の私にとってほとんど無縁の人間像を紹介してくれる筈で、したがって別人の著作を読むようなぐあいなのである。むろん、削除したり、改めたり、構成を変えたりすることは許されない。したがって、これらの作品は最初に書かれた時のままである。

だが、これは弁解ではないが、じっさいほとんどの作品は、私をわくわくさせてくれた。「このような物の見方をし、かつ、このように表現できるやつに会いたいものだ」と、現在の私の心が囁きかける。一方では、これらの物語の背後に、私は大胆な哲学を嗅ぎあてる。

「この男の奇妙な、鋭い探究心は、その後より進展しえたであらうか！」私が正直のところ、自分の作品をどう思っているかということは、トーケマダ（スベイン最初の冷酸な宗教裁判所長）をもってしても、白状させることはできない。

いうまでもなく、この自分が何事にも疑いと驚異の念を抱き、客観的に対象を見つめようと志していた時代のことは興味がある。この客観的というのは、必ずしも真実を見るという意味でなく、自己を没却して見るということなのであるが、じっさいにはその逆の執拗な自己主張が現在の私にも、また一九〇六年の私にもあった。

思い起こせば、これらの作品は樽から酒が流れ出すように、私の内部から自然にあふれ出てきたもので、多くは私の情緒に対する隠れた、解明することのできない性質の衝撃に

端を発するものと考えている。この「解明されない」という意味は、むしろ、予期しないということである。

さらにその「衝撃」は、カナダの牧場とホテル経営に失敗し、ニューヨークに出て新聞記者になった、二十代の世間知らずな若者の上にも容赦なく襲いかかってきた。放浪時代の私は極端な貧困と飢えに悩まされた。それは『三十以前の冒険』(一九三九)という自伝に記しておいたので、ここではくり返さない。そうした経験は、現在の私にとって心理学的な興味がある。たとえば、犯罪と悪徳の巢であるニューヨークでの経験は、その社会の恐怖を咀嚼しないで呑みこまねばならぬということから、私の感受性をひどく傷つけたのだが、その衝撃が私の眠っている潜在意識に種子をおろし、のちに生育をとげ、劇的な形で物語の中に登場したということは言えると思う。

もう一つはいうまでもなく、いわゆるゴースト・ストーリーである。この種のジャンルは私にとって、親類以上に近い存在であって、最近もBBC放送が「ぞっとする話」を放送してくれと言って来たときにも、悦んで応じたものだ。だが、その関心は、もっと明確に「人間能力の延長」に対する関心と定義されねばならない。ゴースト・マンと言われるのは、私にとって名誉侵害であり、このさい反駁しておかねばなるまい。私の超心理学的な面への関心は、常に意識の拡張あるいは拡大ということに向いているのだ。もし、幽霊が可視的なものにすぎないならば、それを見るということ以外の関心は持ちようがない。

だが、私たちは異常な刺激のもとでは、正常の範囲をはるかに超えて、見たり聞いたり感じたりする能力が与えられているのではないか？　このような能力は人間存在の内部にあって、時おり私が関心をもつ局面において、表面にあらわれてくる。異常な刺激は、病気とか（それは施療院とか精神病院に症例がある）、ごくありふれた人物を襲う強烈な怖れや美感の衝撃によるのであって、ケチな懷疑論者がいくら否定したところで、それが存在することはまちがいない。一世代もまえに、これらの作品を書いていらい、私はより多くの実例に接しているのである。

私のほとんどの作品は、ふだん平凡な人間が恐怖や美の衝撃に見舞われ、超感覚的な体験をするという趣向をとっている。『空屋』（一〇六）の中で、一人の平凡な人間が透視力と明透聴力を獲得するというケースと、『ケンタウロス』（一一九）の中のありふれた主人公が、超人的能力をもつ星霊体であることを自覚する一件とでは、大きな差があるようだが、原則は同じである。両者とも、正常な意識の拡張ということだからである。この点において、私の作品は、世間なみの単純素朴な幽霊話にくらべ、より進展したと信じている。

いつ書いたかもわからぬ初期の作品は、野心的な意図よりも習作のつもりで書いた。処女作の版元イヴリン・ナッシュも言ったように、ただ「きっと大きなカンバスで自分の腕をたしかめ」たいと思っていただけである。この「もっと大きなカンバス」という言葉は、三十六歳のころの私を大いに刺激した。いま私の最初の本が再版されたのを見ると、

当時うけた刺激がまざまざと蘇ってくる（『空屋』は一九四七年、リチャード・プレスから再刊された）。だが、自分の思いを活字にしたことにより、むしろ劣等感が強まった。それを救ってくれたのは、当時まだパツとしなかった「スペクテイター」紙が、最大級の讃辞を掲げてくれたことで、私は半ば呆れ、半ば喜んだのを覚えている。ついで「モーニング・ポスト」紙が、ゴースト・ストーリーをアングロ・サクソン特有の文学として、私の本をその中に位置づけ、ヒレア・ベロック（英国の詩人、風刺作家）につながるものがあると言ってくれた。それは私にとって、たいへんな励みだった。

こうした「誠実な批評」にまじって、いい加減な悪評もあらわれたが、その傾聴すべき点を取り入れ、もう一度試みてみようと思った。——『耳傾ける人』（一九〇七）は、こうして出版された。記憶に間違いなければ、そのとき版元のナッシュと彼の寄贈先の読者モード・フォークス、それに私が、いかめしい顔付きをしながら、カパーに大きな耳を描いたかどうかとか（そのころ、絵入りカバーはまだ作られていなかった）、表題作の主人公が、他の作品の登場人物にくらべて、あまりに病的すぎないか、などということを論じ合っていた光景を思い出す。そのうち、私がだんだん自分で書いた恐怖譚に嫌気がさして来たことも。

こうした作品成立の楽屋話は、私の読者には興味があると思う。一人よがりに見えるかも知れないが、古い記憶をたどるということは、これではなかなかおもしろいことなのだ……。友人と二人、カナダ製の独木舟カヌーに乗ってダニユーブ川を降り、プレスブルク（ブラヴァイ）

の下流に何百とある孤島の一つにキャンプを張ったとき、その柳が強風に煽られていて、われわれを一呑みにするよう感じられたものである。その一、二年後、同じ行程を艀で旅したとき、秒浜に近い水草の中で、その根っこに足をとられた死体が朽ち果てているを見た。こうした経験は、『柳』の中に書いたとおりである。

また、ブライトン・スクエアの幽霊屋敷にある女性と探險に出かけ、二人してがらんとした部屋に坐っていたとき、その女性のやや皺の多い顔が、いきなり子供のようにスベスベした、真白な顔に変わってしまったので、幽霊を見るよりよっぽどよかった、という経験もある。

また、ブラック・フォレスト(ケールヒース)の真只中にあるモラヴィア地方の学校は、私が少年時代のおぞましい二年間を送ったところだが、後年そこを訪れたとき、経営難のため悪魔札拜に場所を提供しているのを発見した。その経験は『邪悪なる祈り』に記してある。

あるいは、バルト海一帯に『犬のキャンプ』に扱ったような人狼伝説があるのに、私と行を共にした一行六人は、私の作品を読むまで、幸わせなことにそれを知らなかったという話もある。

だが、それよりおもしろいのは『いにしえの魔術』に描いたフランスの古い街で、小説では人々が猫のようにコンコン歩きまわり、街路を斜(かた)かに歩き、耳と尾をピンとおっ立て、そのガラガラする鋭い眼を、ある隠された、秘密の生活に向けており、一方ではわれ